

法村圭緒／咲くやこの花インタビューvol.6

法村圭緒(ほうむら・よしお)【平成 8 年度 演劇・舞踊[クラシックバレエ】



2016年12月3日(土)、大阪中央公会堂で開催される「咲くやこの花芸術祭 2016」より、華麗なるクラシック・バレエの世界「赤ちゃんと一緒に楽しめる『舞踏会へようこそ』」に出演する法村圭緒さん。大阪に本拠地を構え、来年80周年を迎える全国屈指のバレエ団、法村友井バレエ団の後継者にして、同団で長らく主役を務めてきた日本を代表するダンスール・ノーブル(王子役が似合う気品溢れる男性舞踊手)です。10代で名門ワガノワ記念ロシア・バレエ・アカデミーに学び、近年は後進の育成にも力を注ぐ法村さん。お話を伺うため、佳境を迎えた『舞踏会へようこそ』の稽古場を訪ねました。そこで語られた本公演の見所からバレエに対するアツい思いまで、“今だから話せる”本音満載のインタビューをお届けします。

©取材・文・撮影＝石橋法子

「ワークショップでは初心者もダンサー気分を味わえます」(法村)

今年の咲くやこの花芸術祭で上演されるクラシックバレエ公演『舞踏会へようこそ』は、「赤ちゃんと一緒に楽しめる」という副題もユニークですね。



じつは、お客さまからのリクエストを元に事務局からご提案を頂いたのですが、これは素晴らしい試みだなと思いました。通常はどんな公演も、未就学児の入場はお断りすることがほとんどだと思うのですが、「咲くや〜」ではそれが許される。こういうのもアリだなと思える新たな試みができる環境だなと思いますね。今回はタイトルに付けることで、あらかじめお客様にも「そのつもりで来てください」と周知できますし(笑)。演目自体も客席がワイワイなっても大丈夫なものにしています。

第1部は、法村さんからのバレエ解説。第2部でJ.シュトラウスの『卒業記念舞踏会』を上演します。

短時間ですが、第1部では「バレエとは〜」という起源のお話から、演目のあらすじまでを簡単に解説させていただきます。今回の演目『卒業記念舞踏会』は、前回「咲くやこの花芸術祭 2013」に出演した際に、「次は絶対にこの作品を上演したい」と中央公会堂という場所のイメージから決めていました。女学校の卒業舞踏会というシチュエーションが、会場の雰囲気にもぴったり合うなど。物語は卒業舞踏会に男子生徒が呼ばれ、普段は会うことがない男女の淡い恋心のようなドキドキを描くもの。本当は観客も舞踏会の参加者のように、出演者を取り囲んで観て頂ける中集会室も良いなと思ったのですが、今回は大集会室のステージ上で上演します。とはいえ、客席から出てくるような演出も考えていますので、本番が今からすごく楽しみです。



その他の見所は？

僕が企画を考える際、一番に心がけているのが、若いダンサーを育てて押し上げるということ。今回はまだどこにも出ていないフレッシュなダンサーたちが出演します。卒業生役以外のキャストは、うちのスタジオの生徒たちですが、彼らにも舞台上で経験を積むことでダンサーとしての強さを身に付けて欲しい。生徒たちにとっては、スタートラインの公演ですね。



楽しい作品を提供することはもちろん、出演者にとっても意義のある公演なのです。

そうですね。下級生は中級生に、中級生は卒業生に憧れて…という物語とキャスト自身がシンクロするような部分もある。ほんとに、若い 20 代のメンバーばかりなので、僕もついていくのが大変です(笑)。僕は士官学校の将軍役ですね。女校長とも仲が良く、卒業を機にさまざまな人間模様が明るみになる。単に踊りを見せるのではなく、この人はどういう人間なのか、どういう恋をするのか、どういう”逃げ方”をするのかなど、ちゃんと人間模様が描かれる。卒業生4人のキャラクターも様々で、やんちゃな子もいれば天然な子もいる。そんな彼女たちに周りが翻弄されていく姿を見ているだけでも楽しいですよ。



また、公演終了後には、同じく大集会室で「はじめてでもやさしい『親子でバレエレッスン♪』」も開催されます。

前回のワークショップでは親子で参加される方が非常に多かったので、今回はタイトルから「親子でバレエレッスン♪」とつけました。普通バレエの教室では、クラス分けでのレッスンが多いのですが、子どもたちだけでも、お母さんたちだけでもモジモジしてしまう。それが親子になると躊躇なくバーで向かい合ってレッスンされていたので、これは有効だなと。普段見慣れない光景でもあり、指導する方としても新鮮でした。もちろん親子に限らず、男女問わずお一人から参加して頂けます。



具体的なレッスン内容は？

参加者の皆さんにはダンサー気分を味わって頂こうと思います。先程まで公演が行われていた舞台の上に立ち、バーレッスンとお芝居の稽古、最後は実際に音楽を流して、お芝居をつけた踊りを踊って頂きます。初心者の方でも大丈夫。舞台に立つなんて滅多にできない経験ですし絶対に面白いと思います。



舞台は聖域というイメージで、それくらい敷居の高さを感じる方も少なくないバレエですが、気軽に体感できるまたとない機会となりそうですね。

舞台は聖域ではありませんが、もちろん敷居の高さはあります。僕は敷居を下げることはしません。やっぱり、その高さを含めて経験して頂くのがいいのかなと。一番感じるのは、物理的な舞台の高さかもしれませんが(笑)。

(笑)。先程、出演者が若手ばかりというお話がありましたが、法村さんが咲くやこの花賞を受賞されたのも20代前半の頃でした。当時を振り返ると、ダンサーとしてどのような時期でしたか。



時期的には周囲から跡取りと言われ、悩みや苦悩は常にあって。今まで完璧にやりきったと思ったことは一度もないかもしれない。当時は賞を受けたことに対して「やったー！」というより、「俺に頑張れと言ってるんだな」と激励という意味合いで受け止めていました。これから、頑張んなきゃなって。

1997年の「咲くやこの花賞」受賞に前後して、第3回ワガノワ賞国際バレエコンクール第3位、村松賞、舞踊批評家協会賞「新人賞」などこの時期、各コンクールでの受賞が相次ぎました。

そうですね。それらも同じく激励として受け止めていました。もちろん、バレエ団を創設した祖父母(故法村康之、友井唯起子)、それを受け継ぐ両親(法村牧緒、宮本東代子)の下に生まれた環境や、親の七光り

という部分もあったと思います。注目もされていたので、だったら頂いた賞に恥じぬよう精進していこう、そういう気持ちでしたね。

バレエは物心つく前に始められたのですか。

母が言うには4才ぐらいまでは嫌がっていて、「5才になったらやる」と言っていたらしいです。一番最初に教わった石川恵己先生からはよく「圭緒くんは最初、全然先生の方を見て練習してくれなかったのよ。音楽が流れると誰よりも一生懸命に踊っていたけど」と言われていました。周りは女の子ばかりで、恥ずかしくて先生の方を見れなかったことを覚えています。横目で見えていたから踊れたんですけど、先生もそれが分かっていて、わざわざ僕の横で踊ってくれたり。後から分かったのは、先生は僕の父親から「バレエを嫌いにならないように指導してね」と頼まれていたそうです。だから一度も怒られた記憶がない。甘やかされていましたね。だからといって、自分が上手いとは一切思っていませんでした。

常に後継者であることは意識されていましたか。



はい、目の前に決められた人生のレールがポーンと1本ありました。そこをトロッコに乗って、今なお進んでいるのかな。反発はもちろんありましたよ。中高生時代が一番ひどかった。

それは思春期の男の子として、バレエが恥ずかしく感じたり？

それは関係なくて。俺にはもっとやりたいことがあったんだろうな、ていう。だから「何で俺には選択肢が1つしかないんだ。俺はこの星の下に生まれて不幸だ」って、はっきり言いましたから。それを聞いた両親は影で嘆いていたでしょうね。今は自分にも子どもがいるので、親の立場になって考えると理解できるのですが。バレエを楽しいと思ったことは、少ないのかもしれない。

読書や人との語らいなど、気持ちを奮い立たせるために力になったことはありますか。

誰かと語らうことはなかったですね。僕にはライバルという存在がいなかった。探せばいたのかもしれませんが、でも置かれた立場も違ってたでしょうし。生徒時代も「どうせ君は上にいくよね」という感じで、同年代の人たちがどんどん離れていって。男だし結構ひとりでポツンといることが多かったですね。この話しだと、僕ネガティブですよ(笑)。

恵まれた環境はあったにせよ、やはり努力なしには今のお立場はないはず。

努力したんでしょうね。跡継ぎだ、何だって言われるからには、やっぱり「一流にならないといけない」という思いはありました。ワガノワ記念ロシア・バレエ・アカデミーに留学したことで、ひとつその思いが確固たるものになったので。自分にはこれしかないんだなど。しょうがないと覚悟を決めつつ、向こうでバンド活動とかもしてましたけど。



そういった時間もあつたのですね。

そうでもない、やってられない(笑)。内緒というか、大半のひとは僕の音楽好きは知っています。音楽は中高時代からずっと好きでした。バレエ以外で感性で出来ることって音楽なんですよ。昔からX JAPANが好きで、そこからドラムに入りました。音楽って聴いて楽しむ人と演奏して楽しむ人がいると思うんですが、僕は後者のタイプ。いまでもドラムは叩いています。子どもたちが学校にいつている間とか、何もかも忘れられるので、心のバランスを保つために必要です(笑)。



世界的ドラマーYOSHIKIがお手本となると、音楽も相当練習されたのでは。

YOSHIKIのドラムってすごく難しいんですよ。だからやり過ぎると、完璧に叩こうとして逆にストレスが溜まるときがあるので。ドラムは楽しんでやるようにしています(笑)。

聴いてきた音楽とクラシック音楽とで、何か通じる部分はありますか。

特になんですけど、リズム感に関しては、僕は小さいころから絶対の自信があります。ここで見せ場というアクセントの取り方は、ドラムにも通じるリズム感だと思います。それがX JAPANから来ているかは、分かりませんが(笑)。

(笑)。これまで積み上げた20年ものキャリアの中で、印象的な作品や役柄とは？



『ドン・キホーテ』ですね。あの作品はロシアでも踊らせてもらったし、出演する度に次はこうしよう、次はあ
あしてみようと変わっていきける。他にも、演じることの多かった王子役は僕の中では職業だと思っていま
した。みんなから王子、王子と言われるうちに、「俺って王子なんだな」と(笑)。「気品があるから」とも仰っ
ていただき、それはありがたいことですし、自分でも努力したんですよね。父親も人にはない気品を持って
王子役を何年も務めてきて、僕も同じように王子役をたくさんやらせて頂いて、今度は伝える側ですよ。

気品を養う上で、大事なものは。



やはり普通の過ごし方でしょうね。いつも美しいティーカップでお茶を飲むということではなく、言葉遣いや相手の話を聞く姿勢、歩き方や姿勢かもしれない。気品は内側から出てくるものですし、デジタル化が進んだ今の時代にどこまで伝えられるのかなと。

「自分の意見を持った、芸術家としてのダンサーを育てたい」(法村)

近年は、後進への指導にも力を注がれているそうですね。

40歳を過ぎても王子役を踊れたらいいんですけど、自分で鏡を見てカッコ悪いなと思ったら引退しようとは、ずっと昔から思っていて。実際、今年の6月で一応シャッターは下ろしているつもりなんです。今後、大きい舞台の予定は入れていませんし。だから、今回『卒業記念舞踏会』でレ・シルフィード役を踊るのは、レアなんです(笑)。この特別感も咲くやならではですね。自分でもどこまで飛べるか分からないけど、素晴らしい仲間が揃っていますので、彼らを引っ張るためにももう少し頑張ろうと。



伝える立場を担うことで、バレエに対する認識に変化はありましたか。

接し方は変わりましたよね。生徒を教える時は父親じゃないですけど、背中を見せる必要もあると思うんです。やっぱり先生の真似をするから。先生がちゃらんぼらんではおかしなことになる。いざ教えるにしても、自分が体感して習得したことじゃないと、絶対に伝えられない。例えば、足の形は一番、二番と型を習えば誰でもできるんです。でも大事なのは「なぜその姿勢が必要なのか」を知ること。



なぜ舞台では体を斜めにして立つのか。それは女性が細く美しく見える角度だったり、立体感を持たせることで舞台に奥行きを生み出すためでもある。もちろん真正面を向く型もあるんですけど。生徒たちには、今なぜその動きが必要なのかを考えさせる。よく「爪先を伸ばしなさい」という指導も耳にしますが、それだけでは浅くて。どういう風に体を動かせば爪先が伸びるようになるのか、筋肉の使い方まで伝える。ただ伸ばしなさい、だけでは指導として違うんだなと。自分でもここ数年の間に、教えるための技術を習得したのだと思います。僕自身、昔はそこまで考えずに踊っていたと思うので、若い頃より今の方が絶対バレエが上手いと思います(笑)。



確かに一見同じ動作でも、使っている部位が違うとそれは全く別の動きとも言えそうです。

そういう意味では、もったいない時間を過ごしているダンサーがいっぱいいるから。そういう子たちを見ると「もう少しこうしたら、もっと良くなるんじゃないの」と、言いたくてしょうがない(笑)。ちょっと頭の位置を変えただけで、ブレずに回れるようになったりするから。



また新たなバレエの楽しみ方を見つけたのですね。

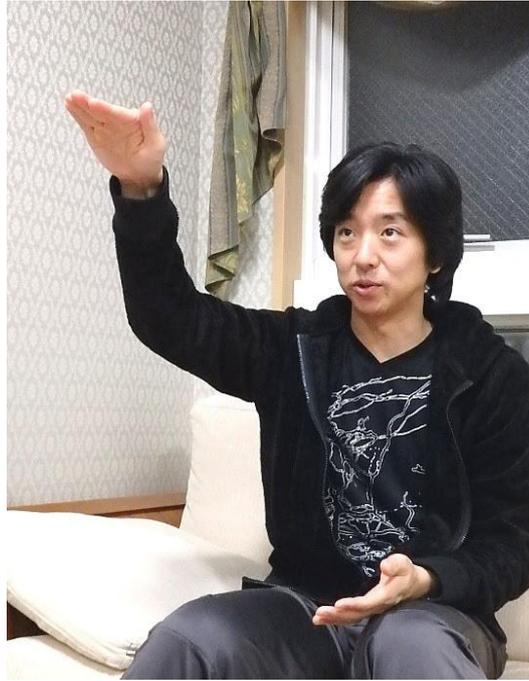


今、ボーイズクラスを週2回で教えているんですけど、ちゃんと先生に許可を取って外部から参加する生徒も多くて。そういう子たちは先生もそうだし、本人も親御さんもみんなのやる気が全然違う。例え最初はほけ〜としていた子でも、2回目には変わるんです。いつものように、女の子に囲まれてやるのではなく、周りが全員男の子のクラスで練習するので、他の子がビシッとやっているのを見ると、2回目からはガラリと意識が変わる。翌日、参加した先生から「今までと全然やる気が違います！」とよく驚きの電話が入りますね。何したんですかって(笑)。男の子はね、女の子と違って化学反応を起こすんですよ。それこそライバル意識。同じような年代の子がビシッとやってる、負けずにやんなきゃって。その反応が楽しくてしょうがない。内心「やっとなる、やっとなる。もっとがんばれ〜」ですよ。相乗効果でスタジオの子たちも変化しますね。



法村さんご自身は、印象深い先生との出会いはありましたか。

僕がロシアで習っていた先生が名教師なんですよ。ゲンナジイ・セリュツキ先生と言って、世界で活躍しているダンサーを数多く輩出していて、あんな風になりたいなとそのうち思うようになりました。例えば、何かひとつ出来たら、絶対にそこで止めない。3回転ができれば次は4回転。ここまで飛べたら次はもっと高くとか、限界を作らない。もちろん痛みが出たり怪我をしている時は「止めておけ」で終わるんですけど。スパルタとも違う、やる気を起こさせるのがもの凄く上手かった。



その指導法が今も記憶に残っているんですね。

体に染み付いちゃっていますね。先生とは一度言い合いになったことがあって。ある日、学校内の発表会で出演が決まっていたのに、急遽先生が学校長と揉めて、生徒らに「発表会には出るな」と言い出して。僕は納得いかなかったので、「絶対に出るから」「好きにしろ」と。結局出演したのですが、その後2日間レッスンをボイコットしました。顔を合わせるのが気まずくて。でも3日目にやっぱり「いかなきゃ！」って気持ちになるんですよ。そのときは先生も何も言わずに「じゃ始めようか」となりました。

海外では特に、自分の意見を主張することが重要なんでしょうね。

そのときは本当におかしいと思ったことだったので。ロシアでは他にもデュエットの試験に出られない時があって、担当教師は当時85歳ぐらいの重鎮で、神のような存在なんですよ。その人に向かって「どういことですか！」と詰め寄ったので、みんな唖然としちゃって。先生も何か言いたいんだろうけど、こっちが「何のために学費払って、勉強しに来てると思っているんですか」とガンガンに言うもんだから、心臓止まりそうになっていて、周囲が慌てて止めるっていう(笑)。口が達者なので、それで損したこともいっぱいあるけど後悔はしていません。そういうことがあって、今の自分があると思うから。やっぱり、「ああなりたい」だけではなく、「ああなりたくない」という気持ちも知っておかないとダメなんだと思います。そういう色々な経験が自分の中で合わさって、怒りや愛するという舞台での表現力に繋がっていくんだと思います。

今、若いダンサーに伝えたいこととは。

僕の意見が正しいか否かは別として、やっぱり言いたいことは言いなさいと、それが”伝える力”になるから。今は子どもたちが黙っちゃって何も言わないじゃないですか。それでは演技力が育たないんですよ。言葉で伝えることも、演技も同じこと。だからボーイズクラスでは「挨拶から大きな声で」と伝えています。聞こえない挨拶は、挨拶じゃないですからね。



普段の生活態度が表現に繋がるのは、気品にも通じるお話ですね。ボーイズクラスでは息子さんも生徒の一人として参加されているとか。

一応みんなと同じようにラインは引いているつもりですが、つい「そんなんじゃ身に付かないよ！」とか、他の子より厳しいかもしれません(笑)。中学3年生ですが僕と同じぐらいの背丈で、僕よりも顔が小さい。小さい時に足を引っ張っていたこともあり、足も僕より長いですね。

足を引っ張っていたとか、本当ですか！？

本当です。小さい頃は、骨と骨をつなぐ関節にカルシウムが溜まるので、子どもが寝ている間に腰を持ちながら踵をゆっくりと引っ張ってやる。コキコキとか音が鳴って、骨と関節の間に隙間が出るんですよ。そこに寝てる間にカルシウムが溜まっていく。息子は何をやってもスースーと気持ち良さそうな寝息立てて寝ていましたね。何の話をしてるんだろう(笑)。

(笑)。では最後に今後の目標を教えてください。



次世代に通用する芸術家としてのダンサーを育てていく。そのために自分が培った経験を伝えて、咲くやこの花芸術祭のような公演の機会をたくさん作っていく。稽古ばかりでは身に付かない。人に観てもらうことが大事で、本番のステージでしか培えない経験ってありますから。この先、育てたダンサーがうちのバレエ団で活躍してくれたら一番嬉しいですけど、そういう人は外に出たがるものだから。それはそれで嬉しいことではあります。ただ、うちはいつでも大歓迎ですよと(笑)。こういう活動が、自身の喜びにもつながっていけばいいなと思います。毎回、公演を立ち上げる段階では頭痛を越えて吐き気をもよおすぐらい辛いことの方が大半ですが、それでも意見を言い合える信頼できるメンバーも揃っていますし、何よりすべてをやり終えて、お客様から拍手を頂く瞬間が一番幸せですね。今のところバレエを楽しめていると思います(笑)。

改めて、法村さんが考えるバレエの魅力とは。

クラシックバレエを含めて文化というものは心の肥やしというか、人間形成には絶対に必要不可欠なものだと思います。公演を観ていただいて素晴らしかった、悲しかったとか、誰かと意見が違っていても一向に構わないものなので。それぞれに感じていただいて、最終的に観てくださった方が笑顔になるような公演を、今後もお届けしていきたいなと思います。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……来年 80 周年を迎える法村友井バレエ団が、僕にとっての大阪名物かな。やっぱりこれだけたくさんのファンの方、団員、生徒さんがいる中で、同劇団でしかできないことがあると思うんですね。80 年もの間積み上げてきた独自の感性や表現を大事にして、今後 100 周年からその先、どこまでいくのか分かりませんが、歴史を重ねて行ければと思います。